

ラジオドラマ用オリジナルシナリオ

One Shot Story Series

## 「残り香の記憶（前編）」

作・牛

### 《キャスト紹介》

- 男性客            . . .            年齢24才。営業マン。  
地方人特有の素朴さ、純情さがある。  
過去の女を探している。
- 女性客            . . .            キャリアウーマン風都会っ子。  
機知とユーモアがある。  
好奇心旺盛。行動派。
- マスター         . . .            女性バーテンダー。

### 《 舞 台 》

港が近くにあるBAR「サンドリオン」。  
店内には常にジャズが流れている。

(PLAY-1)

S E ドアの開閉の音

マスター : いらしゃいませ。  
女性客 : こんばんわ、マスター。  
マスター : お久しぶりです。  
女性客 : むし暑くなってきましたね。  
マスター : そうですね。お飲み物は、何になさりますか？  
女性客 : そうね、ジン・フィズをもらおうかしら。  
マスター : かしこまりました。

S E ドリンクを作る音。

マスター : お待たせしました。  
女性客 : ありがとう。(一口のみ) ああ、おいしい。  
男性客 : (呟くように) 間違いない、この香り・・・  
(感慨深げに) この香りだ・・・  
(女性客に切羽詰まった感じで) すみません・・・  
女性客 : はい？  
男性客 : その香り、あなたがつけている、その今の香水・・・  
女性客 : あら、ごめんなさい。ちょっときつすぎたかしら・・・  
男性客 : いいえ・・・  
女性客 : 失礼よね、やっぱりこういうお酒を頂く場所では。  
男性客 : いや、そうじゃないんです。  
女性客 : え？  
男性客 : その香水の名前、教えてもらえませんか？  
女性客 : それって、始めて会った女性を会話に誘う口実？  
男性客 : (じれったい) いや、そんなんじゃありません。  
僕はただ、その香水の名前を知りたいだけなんです。  
女性客 : なーんだ。わたしにじゃなく、  
わたしがつけてる香水に興味があるわけか。  
男性客 : あ、ごめんなさい。失礼しました。  
女性客 : そんな簡単に謝られると弱いだよ、わたしって。

マスター : 彼女がつけてる香りに、何かわけでもありそうですね。  
男性客 : はい・・・

(PLAY-2)

男性客 : 自己紹介もしないで、変なこと聞いてしまって  
申し訳ありません。僕は島田と言います。  
女性客 : 冗談よ、気にしないでよ。判ってたわ。  
でも、あまりにも表情が真剣だったから、つい。  
あなたみたいに素朴で素直な人見たら、  
からかいたくなっちゃうのよ。ごめんなさい。  
男性客 : いいえ・・・  
女性客 : わたしがつけてる香水の名前を知りたいのね。  
男性客 : はい。  
女性客 : プール・ムッシュって言うのよ。  
男性客 : (囁み締めるように) プール、ムッシュですか。  
女性客 : そう、シャネルから出ているの。  
男性客 : シャネル。シャネルと言えば有名じゃないですか。  
女性客 : ま、一応。  
男性客 : じゃ、どうして見つからなかったんだろう・・・  
女性客 : あなた、この香りを探していたの？  
男性客 : そうなんです。  
女性客 : 意味深ね。でも、間違いないの？  
男性客 : ええ、臭いには敏感なんです。  
でも、一応もっとよく確かめさせてもらえませんか？  
女性客 : ええ、いいわよ。

S E バッグから香水入れを取出す音

女性客 : はい、どうぞ。  
男性客 : こういう、入れ物に入ってるんですか？  
女性客 : それはアトマイザーって、携帯用の容器よ。

あ、だめよ、直接手にかけちゃ。  
貸してみて・・・香水ってのはね、  
こうやって一度コットンに染み込ませて、  
ワンクッションおいて肌につけるの。  
その方が香りがソフトになるのよ。  
それでそのコットンは洋服ダンスとかバッグに入れておくの。

男性客 : (感心して) へー。  
女性客 : どう、その香り？  
男性客 : ... うん、間違いない。この香りです。

(PLAY-3)

男性客 : でも、どうして有名ブランドなのに  
判らなかったんだろう・・・  
女性客 : それは・・・限定販売だったからよ。  
男性客 : 限定販売！  
女性客 : そう、数が限られた商品なのよ。  
男性客 : (納得) あー、そうか。限定販売・・・  
女性客 : 納得した？  
男性客 : はい、しました。  
女性客 : だったら、そのいきさつをよければ聞かせてよ。  
男性客 : いきさつ？  
女性客 : ええ、あなたがそんなにしてまで探し求めていた  
プール・ムッシュのいきさつ。教えてあげたんだから、  
聞かせてよ。  
男性客 : (困る) はあー。  
女性客 : 好きだった女性がつけてたんでしょ。  
男性客 : はい・・・  
女性客 : でもその女性はもういない。別れたんだ？  
男性客 : 別れたというか・・・  
女性客 : 振られたの？  
男性客 : 振られたのかなあ・・・  
女性客 : とにかくいなくなったんだ。  
でも、もう1度会いたいから探してる。

男性客 : そうなんです。  
女性客 : いつから？  
男性客 : 3年前です。  
女性客 : つき合っていたの？  
男性客 : 3ヶ月間暮らしていました。  
女性客 : 暮らすぐらいなら、香水以外にも色々手掛かりがあるでしょ。  
男性客 : それが、名前以外は知らないんです。

(PLAY-4)

男性客 : 僕がまだ大学生で神戸に下宿していたときでした。  
僕は実家が愛媛の三沢というところで、  
今の勤めも地元市内なんです。  
女性客 : じゃわざわざ探しに来てるわけ？  
男性客 : いいえ、出張です。  
大阪神戸にうちの会社は出張が多くて、  
今回も1週間の滞在なんです。  
それで神戸に来る度にこういう彼女が好きそうなお店を・・・  
女性客 : そう・・・  
男性客 : 彼女との出会いはほんと偶然のようなものでした。  
アルバイトをして帰りが遅くなった晩、  
夜道に彼女が立っていたんです。  
その様子が今にも何か消え入りそうで、  
もの哀しかったから・・・  
女性客 : それで声を掛けてあげたの？  
男性客 : ええ、それまで田舎者の僕なんか、  
知らない女性に声を掛けたことなんか1度もなかったけど、  
そのときは妙に自然と出来たんです。  
それで、近くにあった喫茶店に二人で入りました。  
でも、僕は何を喋ったらいいのか判らなかつた。  
そこで僕が知ったのは、彼女が霧野静という名前で、  
僕より3つ年上だということでした。  
女性客 : 霧野静さん・・・それでどうなったの？  
男性客 : 彼女は帰る所が無いと言うもんだから・・・

女性客 : あなたのお部屋に誘ったのね。  
男性客 : 誤解しないでください。変な気はなかったんだから。  
          僕は友達の下宿へ泊まりに行こうと思ってました。  
女性客 : ほんとうかしら？  
男性客 : ほんとうです！・・・  
          (言いにくそうに) だって、僕はまだその時、  
          その、女性経験が無かったですから、  
          そういう時の対応能力に自信が無かったんです。  
女性客 : (吹き出す) 対応能力ね、じゃあなたは紳士的すぎる態度で、  
          その可哀相な彼女に部屋だけを提供してあげたのね。  
男性客 : いいえ。  
女性客 : え？  
男性客 : 彼女と夜を過ごしました。  
          彼女が、彼女と一緒にいてほしいって言ったものですから・・・

(PLAY-5)

男性客 : その後彼女は、僕の部屋にしばしば来るようになりました。  
          気がつけば洋服ダンスの服が、僕より多くなってました。  
女性客 : ふうん。  
男性客 : 僕にとって彼女は大人の女性としての魅力が充分ありました。  
          容姿だけでなく、性格、話し言葉、経験すべてが。  
女性客 : 年上の女性の魅力か・・・  
男性客 : 彼女と暮らすようになって、  
          自分が変わっているのがはっきり判りました。  
          最初は気後れしていたのですが、  
          だんだんと自分の自信となって、  
          これまで割と消極的だった性格も積極的な方へ。  
          外見も彼女に言われてお洒落をするよう  
          になったら、女友達も出来るようになりました。  
女性客 : 男も女次第で変わるか・・・  
男性客 : 彼女は僕の自慢でもあり、  
          もうかけがえのない人になっていました。でも・・・  
女性客 : でも、どうしたの？

男性客 : でも、いつもとても不安だったんです。  
女性客 : なぜ？  
男性客 : 彼女と僕はとても不釣り合いだった。  
彼女は魅力ある大人の女性、僕は社会経験もない子供でした。  
周りも言ってたし、自分でも感じてました。  
それに彼女は、自分の身の上話をあまりしてくれませんでした。  
だからいつも一緒にいる自分の彼女という感覚はなく、  
とても存在自体が不思議で、不安だったんです。  
女性客 : なるほどね。  
男性客 : そして僕の不安通り彼女は、  
突然に僕の前からいなくなりました。  
ある日大学から帰ってみると、彼女の身の回りの物が  
全て部屋から無くなっていたんです・・・  
女性客 : 形の無い、その香りだけを残して・・・  
男性客 : もう探しても見つからないと直感的にそう思いました。  
そう思いながらも、気がつけば僕は街を彼女を  
探してさまよい歩いていました。

(PLAY-6)

女性客 : プール・ムッシュの香りだけを残して去って行った女か、  
香水は間違いないのね？  
男性客 : それは絶対自信があります。  
女性客 : どう思いますマスター。  
マスター : 捜し出すにはちょっと手だてが少なすぎますね。  
男性客 : はい・・・  
女性客 : 手掛かりは名前が霧野静ということと、年齢が今じゃ・・・  
男性客 : 27、だと思います。  
女性客 : 他には？  
男性客 : とくには・・・  
女性客 : お勤めなんかは？  
男性客 : 僕と一緒にいる間は働いていた感じはありませんでした。  
マスター : でも・・・  
女性客 : なんですか、マスター？

マスター : その彼女のお名前が、少し気になりますね。  
女性客 : マスターもそう思ってました。  
マスター : ええ。  
男性客 : どういう事ですか？  
女性客 : ひょとして捜し出せるかもしれないわよ。  
男性客 : 本当ですか！？  
女性客 : 実際捜し出す事はわたしには出来ないから、もしよければ  
探偵さんをご紹介するわ。  
男性客 : 探偵・・・  
女性客 : わたしの従兄弟が私立探偵をしているの。  
男性客 : お願いします。  
女性客 : 神戸の滞在はいつまで？  
男性客 : 1週間です。  
女性客 : 見つからなくても気を落とさないでね。  
男性客 : お願いします。

つづく